

目次

[一] 桐壺帝の八の宮とその北の方……………五

[二] 二人の姫君誕生、北の方逝去……………六

[三] 八の宮、悲しみのうちに二人の姫君を養育する……………一〇

[四] 八の宮、姫君たちと池の水鳥を眺めて歌を詠む……………三

[五] 八の宮の性格と悲運の過去……………五

[六] 八の宮邸炎上し、宇治に隠棲する……………七

[七] 宇治の阿闍梨、八の宮に仏法を説く……………八

[八] 阿闍梨、冷泉院の御前で宇治の八の宮のことを語る。薫、八の宮の道心に惹かれる……………一〇

[九] 阿闍梨、院の御使とともに宇治へ帰り、薫のことを八の宮に語る……………一三

[一〇] 薫、宇治を訪れ、八の宮に私淑、互いに法友の交際を続ける……………一六

[一一] 晩秋、八の宮四季の念仏のために山寺に籠る。薫、宇治を訪れる……………一三

[一三] 薫、八の宮の不在を知り、宿直の男に姫君たちの琴を聴く手引きを頼む……………三

[一四] 月明の下で、薫、姉妹の姫君の優雅な有様をかいま見る……………三

[一五] 薫、来意を告げ、御簾の前で大君に心情を語る……………六

[一六] 老女房の弁、応対に出て、薫に昔語りをする……………四

[一七] 薫、姫君たちに同情し、大君と歌を贈答する……………四

[一八] 帰京後、薫、宇治と文通し、食糧や布施を贈る……………三

[一九] 初冬、薫、宇治を訪れ、八の宮の琴を聴く。八の宮、薫に姫君たちの後見を託す……………五

[二〇] 薫、弁から出生の秘事や柏木臨終の有様を知らされ、遺書を渡される……………四

[二一] 帰京後、薫、拍木の遺書を見、複雑な思いで母宮に会う……………七

橋 姫

一卷名は、薫の歌「橋姫の心をくみて高瀬さす棹のしづくに袖ぞぬれぬる(五一ページ)による。異名「優婆塞(うばそく)」薫二十歳から二十二歳十月までのこと。

二 前の巻々の時期をほぼ指定しながらも、改めて新たな物語世界を語り起すところとする姿勢が見られる。冒頭を「そのころ」で書き出している巻は、他に「紅梅」「宿木」「手習」がある。

三 宇治の八の宮。桐壺帝の第八皇子。光源氏の異母弟に当たる。

四 八の宮の母は大臣の娘で、桐壺帝の女御であったことが一五、六ページの記述で知られる。

五 血筋が他の親王方とは違はずだという世評。東宮にもお立ちになるべきほどの声望をいう。

六 時勢が変わって、弘徽殿の太后がこの八の宮の立坊を画策されたが、権勢は源氏方に移って、後の冷泉帝が東宮に立った。このことは一六、七ページに見える。

七 八の宮の東宮擁立に尽力した人た

[一] そのころ、世にかずまへられたまはぬ古宮おはしけり。
母方四はかたなどもやむごとなくものしたまひて、筋五ことなるべきおぼえなどおはしけるを、時移りて、世の中にはしたなめられたまひけるまぎれに、なかなかいと名残なごりなく、御後見七うしろみなどもものうらめしき心々にて、かたがたにつけて世を背そむき去りつつ、公私おほやけわたくしによりどころなく、さし放たれたまへるやうなり。

北の方も、昔の大臣の御女むすめなりける。あはれに心細く、

一 北の方の親たちが、かつて胸中期待していたこと。八の宮が立坊すれば、娘も東宮妃からやがては皇后になるかもしれないという期待。

親たちの思しおきてたりしさまなど思ひいでたまふに、たとしへなきことのみ多かれど、古き御契の二つなきばかりを憂き世の慰めにて、かたみにまたなく頼みかはしたまへり。

〔二〕 年ごろ経るに、御子ものしたまはで心もとなかりければ、

二 「さくさくし」(寂々し)の音便。もの足りない、心さびしい。
三 願望を表わす終助詞。終助詞「もが」に感動の終助詞「な」がついた形。
四 長女誕生。大君(おおいきみ)と呼ばれる。

「さうざうしくつれづれなる慰めに、いかでをかしからむ児もがな」と、宮ぞ時々思しのたまひけるに、めづらしく、女君のいとつくしげなる、生まれたまへ

五 引き続いて懐妊の様子になられて。実は三年後のことである。
六 「男にてもあれかし」の意。
七 前と同じく、第二子も女子が誕生。中の君と呼ばれる。
八 お産は平安でありながら、その後の肥立ちが悪かったのであろう。

り。これを限りなくあはれと思ひかしづきこえたまふに、さしつづき気色ばみたまひて、このたびは男にても、など思したるに、同じさまにて、たひらかにはしたまひ

一 北の方逝去。

二 以下、八の宮の気持。

三 北の方の容姿や氣立て。

四 幼い姫君たち。
五 親王という身分格式のある身。処世上の行動が自由にならない。

六 本来の意志。ここは出家の本意。
七 「見る」は世話をする意。あとの世話を任せる人もなくて。
八 「およすげ」は成長する、大きくなるの意。「およす」は「老ゆ」の他動詞形。「げ」は「……らしき」をあらわす接尾語。「およすげ」「およつけ」は誤り。

ながら、いといたくわづらひて亡せたまひぬ。宮、あさましう思しまどふ。

あり経るにつけても、いとはしたなく、たへがたきこと多かる世なれど、見捨てがたくあはれなる人の御ありさま心さまに、かけとどめらるる絆にてこそ過ぐし来つれ、一人とまりて、いとどすさまじくもあるべきかな。

いはけなき人々をも、一人はぐくみたてむほど、限りある身にて、いとをこがましう、人わろかるべきこと、と思したちて、本意も遂げまほしうしたまひけれど、見ゆる方なくて残しとどめむを、いみじう思したゆたひつつ、年月も経れば、おのおのおよすげまさりたまふさま